

2018年度 入学試験問題

国語

(第1回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちが生きていくうえで、先入観は必要不可欠なものです。そもそも先入観を得る最初のところはどこだったのかと言えば、ズバリ幼少期のときまでさかのぼります。「オギャー」と産声を上げてから、物心がついてきますと、お母さんがいろいろと教えてくれます。

「このおもちゃはこうやって遊ぶのよ」

「これは食べ物じゃないから口の中に入れちゃだめよ」

というように、日常生活で必要な物事を一つひとつ丁寧に教えてくれます。

もちろんこれは、人間として成長していくうえで非常に大切なことです。こうした基本的な知識を得なければ行動することができません。A、人と話すことができなければ、ご飯を食べることも外を歩くことすらできないわけですから、お母さんがわが子に最初にしてあげることが、話をしたり、食べたり、歩いたり、はたまたトイレの使い方にいたるまで、人間として生きていくための必要な知識を少しずつ、ジックリと与えていくのです。

そして会話、食事、トイレはすべてお母さんがわが子に教えてあげることができずから、この時点ですべて教え終えられてしまうのであれば、先入観は生まれてきません。B、「リップパな大人になってほしい」と願うのは、お母さんとして当然のことです。

そこでお母さんは外に出て、子どもにいろいろなことを伝えていきます。

「目の前に走っているのは自動車で、あの大きな乗り物はバスといって、お金を払えば誰でも乗れるのよ」

「これは信号で、歩行者のところが青だと渡つていいけど、赤の場合は渡つてはいけないのよ」などと高度なことを少しずつ教えていくのです。これはつまり、お母さんの先入観を子どもに移しているとも言い換えられます。これは、①「ミラーニューロン」の果たす役割が大きいのです。

ミラーニューロンは聞き慣れない言葉かもしれませんが、脳にある神経細胞で、「共感する細胞」とも呼ばれています。たとえばテレビドラマを見ていて、悲しいシーンがあったとします。それは現実ではなく演技であるにもかかわらず、感情が高ぶって泣いてしまったというご経験をお持ちの人もいるでしょう。C、野球やサッカーなどを見ていて、手に汗握る大事な場面が訪れて、知らず知らずのうちに、コウフンしていることだつてあるでしょう。これらすべてがミラーニューロンの働きによるものなのです。つまり、実際に自分自身が体験していなくても、それを見ただけで、ミラーニューロンが活性化されて、脳の中で目の前の事象と同じように再現します。

D まったく違う家庭環境で育った男性と女性が結婚して、夫婦生活を長く続けていると、お互いの顔が似てくることがありますが、これもミラーニューロンによるものだと言われています。

す。その他にも愚痴をこぼしたり、人の悪口を言いふらしたり、ネガティブな話ばかりしている人と多くの時間を過ごしていると、ミラーニューロンによって伝染し、悪い影響を受けます。そうなるとうとういった人と多くいるのがよいか。答えは明白で、仕事でうまくいつている人、**E** 普段からニコニコしている穏やかな人と一緒にいる時間が長ければ長いほど、そうした人たち の行動や思考が伝染していくわけですから、日常生活のなかで接するすべてのものが、ミラーニューロンを活性化させるというわけです。

昔から言われる日本人の気質というのは、ミラーニューロンの理論に則って考えていくと、次の二つが当てはまると言われています。

- ①お母さんが「これは〇〇なのよ」というように、子どもに直接教えること
- ②お母さんが前掲①のように教える基本には、日本の近世の歴史（1000〜2000年くらい）のなかで知らず知らずのうちに、お母さんの頭の中に情報として入っている

脳 のもともとの神経細胞の結合方式が、日本人として覚えなければならぬことを覚えやすいような配置になっているという学問的考え方を、ミラーニューロンが作り出していると考えるわけです。つまり、お母さんと子どもの脳の構造自身がミラー（鏡）になっていて、お母さんの言うことを子どもが理解できるような素地ができてくるのです。

そうすると、私たちはお母さんから身近なことを一つひとつ教わることで知識をつけ、生きていくうえで大事な基盤を与えてもらうことはできるのですが、それと同時にここ1000〜2000年くらいでできあがってしまったっている日本人の持っている先入観を、生まれてから3〜4歳までの間にガッチリと頭の中にインプットしていくわけです。**X**とはよく言ったもので、人間の認識の基礎になる部分はこの時期に形成されていきます。

ちなみに日本人と外国人との間で国際結婚をすると、生活様式から考え方に至るまでがまったく違うというところで、トラブルが起きることもしばしば見受けられますが、それは ② この時期に司られた先入観によって、お互いが「違う。そうじゃない」と拒否し、抵抗し合うことから諍い起きてしまうのです。

ただし、こうした考え方の相違は、ある方法によって解決していきます。その方法については、後ほどお話ししたいと思います。

さらに子どもが成長していくと、やがて小学校に入学します。日本の教育は服従型の教えをよしとしています。学校では「先生 の言うことをキチンと聞いて学びなさい」というシステムが当たり前とされていますから、たとえばA、B、C、Dのどれかを選ばなければならなくなった際、先生が「Aが正しい」と言えばAを、「Bが正しい」と言えばBを選択し、それ以外の答えは間違っているとされるわけです。こうした教えを日本ではよしとし、徹底的に子どもたちに植え付けさせます。

日本でこうした教育しか受けていない人は、「当たり前じゃないか」とお思いかもしれませんが、実は日本のような服従型の教育システムは、ハッテン途上国に限られており、^③ 先進国の教育は

まったく違います。たとえば歴史の授業を教えていて、偉人の人物像を先生なりにひとしきり話し終えた後に、

「先生はこう思うのだけど、みんなはどうかな？」

と子どもたちに聞きます。こうした対話型の授業ですと、先入観を強く持つこともなく、大脳がおのずと「先入観の詰まっている部分」と「自分で考える部分」の二つの空間を作り出すことができるのです。けれども、日本のような服従型の教育を小学校から高校、大学を卒業するまでの12〜16年も受けますと、頭の中はすっかり先入観の塊となってしまうのです。

たとえば、テレビのニュースで台風情報を中継したとしましょう。このとき雨と風の状況や、今後の進路を伝えて最後には必ず、「できるだけ外出は控えてください」「河川の氾濫には十分気をつけてください」などと注意喚起をするはずですが。

しかし、「○○だから注意してください」というのはテレビを通じて服従を求めているものであり、本来、注意するかどうかは台風情報を見た視聴者の判断にユダねるべきなのです。

テレビニュースのアナウンサーと、テレビの向こう側にいる視聴者のどちらに判断力があるかを一切無視してしまい、「服従させるための情報」をテレビで流し続けた結果、20歳頃になると先入観の塊となってしまうのです。日本のような民主主義国家であっても、あるいは「個人の考え方をソントウウする」とどんなにそう主張しても、お母さん、学校の先生、マスコミと、育っていく過程の中で「服従の原則に基づく教育」を受けてきています。その結果、頭のなかは先入観でできあがってしまったというわけです。

ですから相手から何か意見を言われようものなら、まずは「お母さんが教えてくれたことかどうか」をチェックし、次いで「学校の先生が教えてくれたことかどうか」をチェックする。最後にマスコミ、とくに公共の福祉と文化の向上に寄与することを目的に設立された公共放送事業体とされるNHKが私たちを洗脳したのかどうか、この三つをチェックすれば、あなた自身が先入観に浸食されているかどうかの判断が下しやすいのです。

（武田邦彦『先入観はウソをつく』より）

※ネガティブ……物事を否定的・消極的にとらえること

※インプット……外部にあるものを内部にとりこむこと

問1 —— 線 a のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん A E にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | A つまり | B だから | C また | D そして | E あるいは |
| 2 | A なぜなら | B けれども | C あるいは | D そして | E たとえば |
| 3 | A つまり | B けれども | C また | D たとえば | E あるいは |
| 4 | A けれども | B だから | C あるいは | D たとえば | E そして |

問3 空らん X にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----------|---|----------|---|----------|
| 1 | 三日見ぬ間の桜 | 2 | 石の上にも三年 | 3 | 老いては子に従え |
| 4 | 一を聞いて十を知る | 5 | 三つ子の魂百まで | | |

問4 線アオの「の」について、次の問いに答えなさい。

- (1) アオのうち意味・用法の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。
(2) (1)で選んだ「の」と同じ意味・用法で用いられているものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|---|---------------|
| 1 | 象の鼻はなぜ長いのか。 | 2 | 本を読むのが好きだ。 |
| 3 | 弟の乗っていた自転車だ。 | 4 | 机は部屋の隅に置いてある。 |

問5 次の段落はもともと文中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。あてはまる部分の直前の五字をぬき出しなさい。

これに加えて、テレビや新聞、雑誌、インターネットなどでマスコミも含めたさまざまな情報を、身近なところから耳にします。とくにマスコミは服従型の教育の成果が出る最たる機関、つまり広く多くの人に先入観を与えるやっかいな媒体です。

問6 線①「『ミラーニューロン』の果たす役割」とありますが、「『ミラーニューロン』の果たす役割」としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 母親から幼少期の子どもに対し日常生活に必要なさまざまな知識を習得させる役割。
- 2 自身が先入観にとらわれすぎているか否かを考えさせ判断をさせやすくする役割。
- 3 地震や台風といった災害に備えるための注意喚起や情報に素早く反応させる役割。
- 4 自分が実際に体験していないことでも体験しているかのような感覚を持たせる役割。

問7 線②「この時期」を具体的に示した部分を文中から十四字でぬき出しなさい。

問8 ———線③「先進国の教育はまったく違います」とありますが、これを説明したものと
最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 先進国の教育では「先入観」にとらわれることを避けるため全ての授業で「対話型」が優先されるから、子どもたちは全てを自分で考えるようになる。
- 2 先進国の教育には生きる上での知識の習得は「服従型」、学力を身に付けるには「対話型」という考え方がひろく前提になっている。
- 3 先進国の教育が「対話型」を取り入れられるのは、生まれながらにして大脳の働きに「先入観」と「自分で考える」二つの空間を合わせ持つ子どもたちがいるからだ。
- 4 先進国の教育には「対話型」の授業も取り入れられていて、「先入観」だけにとらわれることなく、自分で考える力も養われる。

問9 日本人にとっての「先入観」について説明した次の文の空らんA・Bにあてはまることを文中からぬき出して答えなさい。ただし()内の字数に従うこととします。

幼少期に母親から教えられる日常生活にとって必要なさまざまな知識は、私たちに
て最初の「先入観」ともいえるものである。その後長きにわたり日本的なA(十字)の中
で成長を続けると、私たちはそこで与えられた知識だけが正しいと考え、自ら判断するこ
とをしないB(五字)と化し、その結果自分の考えと異なる価値観に直面したとき、容易
に他者を受け入れないということにつながる。

(問題は次のページに続く)

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

翔の所属する利府中央小学校ドッジボール部「ミヤギノハギ・ドリームズ」は、転校生・湊ふたばの加入により、予選を勝ちぬき、全国大会（カラーコート）出場への切符を手にした。全国大会に向けてチームが盛り上がっている中、湊の加入によりレギュラーから外れてしまったムッツィは辞めると言って出て行ってしまった。ミヤギノハギ・ドリームズのメンバーはムッツィぬきで練習を再開した。

「いくよ、えい」

アタックと見せかけて僕ら内野へのパスが通った。

「よし、ここだ」

キャッチしたスガが狙いを定めてボールを放った。

「お前らひっかかるんじゃないやねえ。外野へのパスだ」

虎之助くんはスガのパスコースを予測しているものの、他の五人はアタックなのかパスなのか判断しきれていない。一文字フォーメーションが崩れかけている。

「またいくよ、それ」

元外野の愛海へパスが通り、リターンのボールが僕の方へとんできた。

「ここだ！」

岩ちゃんへのアタックが決まった。

「大丈夫？ キャッチする時はもつと低い体勢にならないと」

外野へとうつつた岩ちゃんに、湊さんが注意をした。

X

岩ちゃんが口を尖らせている。

「でもボディーキャッチは必要になるよ……全国大会はもつと厳しいアタックがくるだろうし」

Y

「そんな、私……」

岩ちゃんの言葉に、湊さんは哑然としていた。

「湊さんの基準で言われても、僕はついていけないのだ」

「いつまでも甘ったれてるんじゃないやねえ！」

岩ちゃんが不満をつぶやいていると、虎之助くんが怒りを爆発させた。

「仕方がないだろ？ そんな甘ったれたやつはコートから出ていきやがれ！」

「虎、落ち着け」

多賀監督が制しても、虎之助くんの怒りの表情は変わらない。A をくいしばって、燃えるような感情をかろうじて抑えているようだ。

「戦う前から逃げてちゃ話にならねえ。弱音を吐きに來たんならコートから出ていけ！ ムッツィー

みたいにな！」

Z

「やめて！」

耳を裂くような湊さんの悲鳴に、体育館は静まり返った。

湊さんが大粒の涙を零している。

① 泣き顔のまま、湊さんは走って体育館を出て行ってしまった。

「ふたばちゃん！」

愛海が呼び止めたけれど、湊さんは振り返らなかった。

【ア】

「彩香」

多賀監督の指示で彩香が、湊さんの後を追った。

「みんなひどいよ」

愛海がすすり泣きながらつぶやいた。

「ふたばちゃんのおかげじゃない。あたしたちが全国大会に行けるのは、それなのに、みんな」

愛海が肩を震わせて泣きだした。

「ふたばちゃん、前の学校でドッジ仲間からいじめられてたって聞いて、あたし……」

【イ】

「え？ いじめ？」

驚く僕らに、愛海は流れる涙を指で拭っている。

「みんなとだったら大丈夫だって。仲良くなれるって思ったのに。そう思ったのに」

【ウ】

みんな無言で下を向いている。気まずいのか、誰もお互いの顔を見ようとしない。

「愛海、わかったよ。みんなだって悪かったって思ってるよ、なあみんな」

みんな一様にうなずいている。

「みんな、湊さんのところへ迎えに行こう」

「そうだな、翔の言う通りみんな行こうぜ」

スガがみんなをあおった時、岩ちゃんが虎之助くんのところへ歩み寄った。

「虎、すまなかったのだ」

「いや、オレの方こそアツくなりすぎちゃった……。でもオレより湊に謝った方がよさそうだぜ」

「そうするのだ」

岩ちゃんと虎之助くんが仲直りにと、お互いの拳を軽くコツンと合わせた。そこへ出入口の

ところでうろちよろしていたイズミンが B をひそめながら戻ってきた。

【エ】

「イズミン、どうした？」

「ミス湊は体育館の周りにはいません。ミス彩香もです」

「いない？ どこ行っちゃったんだろ」

次第に落ち着きを取り戻した愛海が涙目のまま言った。

「きつと、あそこにいる」

愛海について僕らは湊さんたちのところへと走った。

加瀬沼公園に着く頃には肩で息をするほどになっていた。

「みんな、きつとこっち」

愛海が指さす「さくらの広場」への方へ急ぐと、彩香の背中が見えた。

湊さんから少し離れたところに立っている。

走って近づく僕らに気づくと、彩香は慌てて人差し指を口の前に立てた。

「どうしたんだよ」

「静かに。ふたばちゃんがアカペラで歌ってるから」

「アカペラ？」

「楽器の伴奏なしに歌ってるってことだよ」

愛海が隣で湊さんをじつと見つめている。そう言えば、愛海はピアノを前に習ってたんだっけ。

C をすますと、聞き覚えのあるメロディーにのせて歌っているのがわかる。たしか四月頃にこの場所で湊さんがギターを弾いていた。そうだ、あの時のメロディーだ。どこか元気がわいてくる、応援歌みたいな歌。

盛り上がる部分を歌いきった湊さんが僕らの方を振り返った。さっきの泣き顔とは違い、すっきりした表情を浮かべている。僕たちに気づくと湊さんは照れているのか、顔を赤くして視線をそらしている。

「ふたばちゃん！」

愛海のかけ声が合図だったかのように、みんな湊さんのところへ駆け寄った。

「あの、みんな……急に飛び出しちゃって、その……ごめん」

湊さんは怯えるように肩を震わせて言った。

「湊さんは悪くないのだ。② 悪いのは僕の方なのだ。許してほしいのだ」

D を下げる岩ちゃんを見て、湊さんは首を横に振っている。

「私……また仲間外れにされちゃうのかなって思ったら、その……怖くて」

「大丈夫だよ、ふたばちゃん。あたしたちドッジ仲間だって言ったじゃん」

震える湊さんを愛海が柔らかく包んだ。愛海の抱擁に彩香も湊さんの左手を両手で包んで涙ぐんでいる。

「私、ドッジやつてもいいんだよね……？」

「当たり前なのだ。本当に僕が悪かったのだ」

湊さんは「もう大丈夫、ありがとう」と愛海と彩香に言っ、僕らに向き直った。「うれしかったんだ、正直。さっきみんなが私を追いかけてきてくれて。今まで離れていく人ばかりで、追いかけてくれる人なんていなかったから」

湊さんはうつすらと涙を浮かべて微笑んだ。湊さんのその笑顔にみんなほっとしたのか、お互い顔をほころばせた。

「そうだ！ ねえ、みんな。仲直りのしるしとして今度の『たなばたさん』にみんなで行こうよ」「たなばたさんって？」

「あ、そっか。ふたばちゃんは初めてだよ。仙台七夕まつりって言って東北三大祭りの一つなんだ。地元ではたなばたさんって言うんだよ。日本一の七夕祭りって言われているくらいすごいんだよ」

「八月なのに七夕なの？」

「うん、仙台は旧暦きゅうれきに合わせて一カ月遅れの八月なんだ。ねえ、みんな行こうよ」

「ぼく行きたい。翔兄あつねいいよね？」

「もちろんだ。僕も愛海に賛成だ。みんなもそうだろう」

愛海の提案にみんなそれぞれ腕うでを上げて歓声かんせいを重ね合わせた。

「じゃあ、僕はムツツ殿どのに連絡れんらくしてみるのだ」

梅雨つゆ明けした真夏の夕映ゆづえに、湊さんの笑顔がオレンジ色かかげに輝かがやいていた。

(中略) ※仙台七夕まつりの帰り際ぎわ

「今日けふはとっても楽しかった。みんな本当にありがとう」

そろそろ帰ろうとしたところで、湊さんが今日何度目かの笑顔を見せた。

「また一緒いっしょに来ようね、ふたばちゃん」

「うん」

「湊も満足したところだし、みんなそろそろ帰るか」

元来た道を戻ろうとした時、露店ろくてんからラジオの音が聞こえてきた。星にまつわる曲がさつきからずっと流れている。今流れているのは『星に願いを』だ。「星のステージ」では次の演奏者が準備ひんべいをしている。湊さんが暗くなり始めた空を見上げている。

「湊さん、どうしたの？」

湊さんは首を横に振った。

「ねえ、星っていえばさ、流れ星を見た時に願い事を言いうと叶かなうって本当なのかな？」

愛海が目を星のようにきらめかせている。

「流れ星かあ、一度でいいからこの目で見てみたいよな」

スガがつぶやいた。

「あんな一瞬で願いを言うなんて不可能に近いのだ」
「ミスター釜っぺ、確率はどのくらいですか？」
「今、パソコン持っていないからわからないけど、確率的にはかなり難しいね」
「やっぱりそうだよね。そもそも流れ星に出逢うのもめったにないもんね」

④ 愛海が残念がつている。

「大丈夫さ。流れ星の法則を知っていれば」

「え？ 流れ星の法則？」

愛海をなんとか励ましたいと思っていたところ、父さんの言葉を思い出した。

「父さんが言っていたんだ。『流れ星を見た瞬間に願い事を言える人は、常にその願いを思い続けているからこそ願いを叶えることができるんだ』って」

愛海は小さくうなずいて、次の言葉を待っている。

「だからラッキーで願いは叶うんじゃないかと、どんなにつらいことがあっても、あきらめずに強い意志を持ち続けることができた人が願いを叶えることができるんだって。これが流れ星の法則だって父さんが言っていた」

「強い意志、か……」

愛海が再び空を見上げて言った。夜空には星がいくつか瞬いて見えるようになってきた。

「本当に叶えたい夢や願いは、何かに頼ってはいけません。だから僕はどんなことがあってもあきらめない。父さんが活躍したカラーコートで僕もヒーローズを決めるんだ。必ず父さんのように優勝してみせる。みんなと一緒に」

湊さんは左手を夜空に掲げて、フック状に曲げた小指を空中で引っかけようとしていた。上下に左手を動かしている。光輝く星に絡めようとして、何か約束をしているんだろうか。

「うん、決めた」

「決めたって何を？」

愛海は僕ら全員を見回して唐突に言った。

「あたし全国大会が終わったら、転校するんだ。アメリカの学校に」

「え？」

⑤ 突然の愛海の発言にみんな動揺している。湊さんだけは愛海の言葉を冷静に受け止めているようだ。

「突然で驚かせちゃってごめん。みんなと離れることを思うと、なかなか言い出せなくて。だからずっと心の中で、みんなと優勝してお別れできたらいいなって願っていたの」

愛海といられるのは、あと二週間もないってことか。

「でも、翔くんの言うようにラッキーを願っていたらだめだよ。あたし絶対、優勝する。優勝してみんなと笑顔でお別れする」

愛海の真つ直ぐすぎる瞳に応えるように力強くうなずいた。

「ああ、その通りだ。絶対、優勝しよう！」

みんなでカラーコートでの優勝を誓い歩き出した時だった。がさがさと音がする方を振り返ると、天然パーマの髪の子供が暗闇に走り去っていく後ろ姿が見えた。

あれは……ムツツ？

その時だった。

「あっ！」

はるか上空に二つの流れ星が瞬き、東の方へ消えていった。

「翔くん、どうしたの？ 早く帰ろう」

「あ、うん。今、行くよ」

もう一度振り返った夜空には、無数の星たちがきらめいていた。

(式田亮『カラーコート』より)

問1 空らん X Y Z にはあてはまるものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1 「ムツツ殿を悪く言うのはやめるのだ！」

2 「そんなことを言われても、なかなかうまくいかないのだ。湊さんみたいに僕はうまくないし」

3 「仕方ないのだ。とれない時はとれないのだ。ムツツ殿もぎつと同じ気持ちだったはずなのだ」

問2 空らん A B C D には身体の一部をあらわすことばが入ります。それぞれひらがなで答えなさい。

問3 次の文はもともと文中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。【ア】～【エ】の中から最もふさわしい場所を一つ選び、記号で答えなさい。

その場にしゃがみこみ、愛海は大泣きし始めた。両手で顔を覆っている。

問4 線①「泣き顔のまま、湊さんは走って体育館を出て行ってしまった」とありますが、この時に湊が感じているものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 全国大会直前にも関わらず弱音を吐く選手がチームにいることについてのいきどおり。
- 2 自分が伝えたかったことは異なった解釈を周りにされてしまったことへのくやしき。
- 3 岩ちゃんの発言を聞いたことによる自分がムツツを追いついてしまったという後悔。
- 4 チームを乱してしまった自分は仲間から追い出されてしまうのではないかという不安。

問5 ——線②「悪いのは僕の方なのだ」とありますが、岩ちゃんは自分のどこが悪かったと思
い、謝っていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 湊がショックを受けることを理解した上で、意図的に相手が嫌がる発言をしてしまった
ところ。

2 湊がアドバイスをくれたにも関わらず、自らの発言でチームワークをみだしてしまっ
たところ。

3 辞めさせられた親友のムツツーのために、当事者の湊に対して怒りをぶつけてしまった
ところ。

4 能力のある湊に対するねたみにより、やる気がなく練習に身が入らなくなってしまっ
たところ。

問6 ——線③「湊さんが今日何度目かの笑顔を見せた」とありますが、湊が笑顔を見せるよう
になった理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 岩ちゃんとケンカをしたことにより、いじめの辛さをチームメートに伝えることができ
るようになっていたから。

2 ずっと求めていた友だちと仲直りをし、チームメートと気持ちを一つにすることができ
るようになっていたから。

3 チームメートと七夕祭りを楽しんだことで、今まで受けた苦い過去を忘れることができ
るようになっていたから。

4 自分を追いかけてくれる仲間がいることに気づき、チームメートに心を開くことができ
るようになっていたから。

問7 ——線④「愛海が残念がっている」とありますが、愛海が何に対して残念がっていると翔
は考えていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 幻想的な話をしているにも関わらず、現実的な話をする男子たちに情緒を壊されたこと。

2 流れ星を一度だけでも見たいのにも関わらず、生まれてから今まで見た経験がないこと。

3 叶えたい願い事があるのにも関わらず、その願いを掛ける流れ星を見る機会がないこと。

4 流れ星の思い出を作りたいにも関わらず、出逢う確率が少ないとみんなに言われたこと。

問8 ———線⑤「突然の愛海の発言」とありますが、なぜ愛海はこのタイミングで告白したのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 茂みに隠れている仲間が付き、チームメートがいるこの機会に伝えようとしたため。
- 2 自分の願いを含めることで、言い出しづらさを少しでも軽減させて伝えようとしたため。
- 3 下がっているチームの士気を少しでも上げようと、全国大会直前に伝えようとしたため。
- 4 強い意志が必要であると理解したことで、言葉により自分の決意を伝えようとしたため。

問9 この文章の表現の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 会話の文末に句点を使わない書き方が、子どもたちの無邪気さを表している。
- 2 場面の变化の際に用いられている聴覚表現が、周りの静けさを強調している。
- 3 時間の变化で移り変わる情景の描写が、チームの絆の深まりと関連している。
- 4 文章の各所に用いられている色彩豊かな表現が、物語に躍動感を与えている。

3 次の【A】～【G】の作品はすべて「鳥」が登場します。これらを読んで、後の問いに答えなさい。

【A】

何が面白くて駝鳥を飼うのだ。

動物園の四坪半のぬかるみの中では、

脚が大股過ぎるじゃないか。

頸があんまり長過ぎるじゃないか。

雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろ過ぎるじゃないか。

腹がへるから堅パンも喰うだろうが、

駝鳥の眼は遠くばかり見ているじゃないか。

身も世もない様に燃えているじゃないか。

瑠璃色の風が今にも吹いて来るのを待ちかまえているじゃないか。

あの小さな素朴な頭が無辺大の夢で逆まいているじゃないか。

これはもう駝鳥じゃないじゃないか。

人間よ、

もう止せ、こんな事は。

(高村光太郎「ぼろぼろな駝鳥」)

【B】 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む 柿本人麻呂

【C】 のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐてたらちねの母は死にたまふなり 斎藤茂吉

【D】 金色のちひさき鳥のかたちして银杏散るなり夕日の丘に 与謝野晶子

【E】 雀の子そこのけそこのけお馬が通る 小林一茶

【F】 目には青葉山ほととぎす初鰈 山口素堂

【G】 行く春や鳥啼き魚の目は泪 松尾芭蕉

問1 【A】の詩の表現について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 比喩表現をひとつも使わずに、自身の思いを直接伝えようとしている。
- 2 駝鳥のようすをやや大げさにえがいて、こっけいさを感じさせている。
- 3 多くの文末を同一の表現でたたみかけて、読者の共感をさそっている。
- 4 省略表現を要所所に用いて、ことばの外にある主題をしめしている。

問2 【A】の詩をとおして作者はどういうことをうったえようとしていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 動物園で飼育されている駝鳥のみじめなようすを描くことによって、よりよい環境で飼育することの大切さをうたっている。
- 2 飼育にふさわしくない場所に駝鳥を無理に押しこめているようすを描くことで、人間のふるまいの身勝手さをうたっている。
- 3 自由にならない環境で生きていかざるをえない駝鳥を描くことで、我々人間も自然な生き方にもどるべきだとうたっている。
- 4 生まれ故郷に帰ることがかなわなない駝鳥の悲しみを描くことによって、人間社会にも通じる文明社会の改善をうたっている。

問3 【A】の詩の最後の行に使われている表現技法と同じ技法が使われている作品を【B】～【D】から一つ選び、記号で答えなさい。

問4 【B】の作品には、「あしびきの」のように、特定のことば(この場合は「山」)の前において調子を整えるはたらきをすることばが使われています。これについて次の問いに答えなさい。

- (1) このようなことばを何と言いますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 かけことば 2 いみことば 3 まくらことば 4 やまとことば

- (2) これと同じはたらきをする五音のことばを【C】または【D】の作品の中から一つぬき出しなさい。

問5 【E】～【G】の作品には季節をあらわす「季語」がよみこまれています。一つだけちがう季節のものがあります。その季節を漢字で答えなさい。

問6 【B】～【G】の中に、「字あまり」の作品はいくつありますか。漢数字で答えなさい。

問7 「集」という漢字の部首名をひらがなで答えなさい。

問8 次の①～③の空らん にあてはまることばを考え、それぞれひらがな二字で答えなさい。

① 能ある は爪つめを隠かくす

② も鳴かずばうたれまい

③ 掃はき溜ために